追　悼

中村恭子先生をしのぶ

野村　文子

【また来世で】

恭子先生が平成13年6月25日，69歳で亡くなられ，私たち身近にいた者たちは49日（8月12日）を迎える頃から「しのぶ会」の準備に取りかかった。10月13日，なんとか，「しのぶ会」を終えた。その後，世話人の一人であるK子さんと話をする機会があり，恭子先生の「思い」に論点が集中した。恭子先生には「もっと研究を続けたかったのに，やり残した仕事があったのに」という思いがあったに違いない。これを果たして「悔いを残した」と表現してよいものだろうか。私たちの話題は輪廻転生に移り，「来世はある」との結論に達してしまった！ つまり，死とは形態の変化なんだ！ というわけだ。恭子先生は全力で，この世を生きられたのであり，本当にやり残した仕事があるのなら生まれ変わって必ず，その仕事に取りかかられるはずだ。これは「悔い」ではなく「宿題」なのだ。自分たちも全力でこれからの人生を生き，それでもなお，やり残した仕事があれば来世でやりましょう，と誓い合って私たちは別れた。一人になって不思議な気持になった。『リトルブッダ』の映画を観た後と，そして『深い河』を読んだ後と似た気分。K子さんの話で気が楽になったのは確かだ。

【最後の仕事となった『患者の声・病気の体験』の監訳】

「しのぶ会」の出席者に，遺族の厚意で帰りに渡されたのが，この本（ちくま学芸文庫）と研究業績表のコピーであった。『霊異の世界・日本霊異記』（著書，筑摩書房，1967年），*Miraculous Stories from the Japanese Buddhist Tradition* (Harvard University Press, 1973, 改訂版 Curzon Press, 1997)，『神話と現実』（エリアーデ著作集第7巻の翻訳，せりか書房，1973年）などの代表的業績がワープロ入力されている中で，この本の部分だけが手書きである。長女の美由紀（みゆき）さんが後から書き加えたものである。宗教学の草分け的存在（単に女性としてだけでなく）であった恭子先生の最後の仕事が「生と死と苦の三つ巴の人間の実存状況」（469ページ）を描き出したジニーン・ヤングーメイスン教授の本の紹介と翻訳であったことは偶然ではないだろう。長きにわたる宗教学研究の末に，恭子先生が辿りつかれた必然であると私は推測している。恭子先生は，この本の校正中に緊急入院され，病室で最終チェックをされたと聞いている。「つのる痛み，処置後の苦しみ，忍び寄る死の影などに冷静に耐えられたのは，本書によるところが大きい。翻訳の過程で，私はすでにそれらを仮想体験していたからである。病中，他者の経験に自らのそれを重ね合わせることで，私は来るものを想像し，それに対して心の準備をすることができた。日米の医療を比較する余裕すらあった。」（471–472ページ）研究に専念することによって「死」と向き合おうとされた，その姿勢，「さすが」とか「みごと」などでは表せない「すごみ」を感じとったのは私だけではないだろう。「宗教と女性」研究会のメンバーで高知在住の寺尾弘子さん（浄土真宗僧侶）が，「しのぶ会」欠席の葉書に次ぎのようなメッセージを書いて下さった。ここに紹介したいと思う。

> 「たしか2－3年前に中村恭子先生からお便り（葉書）をいただき，《四国88ケ所巡りに興味を抱き始めたので助言して欲しい》旨ありながら，そのままになっていました。死を見つめられる期間だったのでしょうか？　合掌」

【最後のおしゃべり—病室での４時間】

同じく欠席者のメッセージを２通，紹介してみたい。「とにかくおしゃべりが好きだった恭子さん，今は誰とおしゃべりしているのでしょう」（E氏）「先生に出会う度に，互いに長いお話になり，とくに先生の心の優しさと厳しさの調和が私にとって素晴らしいものでした。近いうちにローマに戻ることになっておりますので残念ながら・・・」（Y神父） ここにあるように，恭子先生は確かに「おしゃべり」が好きだった。私は知り合ってから約30年間，恭子先生としゃべり続けてきたような気がする。私がまだ院生で研究のことで悩んでいた時，「とにかく，ひとつ書き上げて活字にしなさい」と恭子先生は言われた。「とにかく，ひとつ」を実行して『宗教研究』に「アメリカのピューリタニズム研究に関する動向と展望」を載せたのが私の仕事の始まりだった。あの助言に対し，きちんと感謝の気持を伝えただろうか。今は亡き実母は成人した私に対して磐石の信頼を置き，何も注意はせず，ただ，楽しそうに洋服を買ってくれたものだったが，恭子先生は，まるで「母」のように，私を時に「たしなめ」，時に「注意」された。それを有難いと思わず，うっとおしく思ったことはなかっただろうか。恭子先生が新設の四大へ移られ，短大の後任に私を呼んで下さった時，その厚意よりも，「髪型（当時，私は派手なカーリーヘアーにしていた）の変更」を示唆されて，むくれたのではなかったか。毎週土曜日，短大英文科校舎で「川村学園で失敗せずに仕事を続けていくための講義」も受けた。私学にはそれぞれの歴史があり，伝統や慣習がある。あれがなかったら，今頃，どうなっていただろうか。今でも，最後のおしゃべりとなってしまった病室での４時間のことを詳細に再現することができる。面会の許可がおりて高松病院へ出かけていったのは５月のある日曜日。病名を知らされ，「覚悟していかれた方がいいですよ」との助言も受けていた。高松病院に着く頃には，私の頭の中は混乱し，疲れ切っていた。恭子先生は意外にお元気で「今日は体調がいいのよ」と笑顔を見せられた。お互いに最後のおしゃべりだと知っていた。話の内容は公表する性質のものではなく，私の心の奥に秘めておくつもりである。「そこに箱があるでしょ。一冊，持って帰って」と言われたのが前述の『患者の声・病気の体験』であった。時計を見ると，もう４時間も経過していた。昼食をご一緒して気がついたら夕食の時間になっていて急いで店を出たものの，ＪＲの改札口で，また一時間くらい立ち話をしたのが昨日のように思い出される。恭子先生の最後の言葉は「あなたも身体に気をつけて，年に一回は人間ドッグに入るのよ」だった。歩いて病室のドア付近まで見送ってくださった恭子先生に，思わず「また来てもいいですか？」と私は尋ねた。恭子先生は，にっこりと，そして悪戯っ子のように「いいわよ，でも内緒に，そっとね」と言われた。

【『風を嗣ぐ者』】

これは旧約聖書の一節で，進化論をめぐる「モンキー裁判」を扱った映画の表題でもある。私は，この一節が好きだ。これが意味するところは別にあるだろうが，私は「誰かが風を吹かせ，その流れを別の人々が引き嗣いでゆく」と勝手に解釈している。そして，今，恭子先生こそ，その「風を吹かせた人」だったと思う。「しのぶ会」の通知をする中で，嘲風会の先輩で恭子先生の若い頃をご存知の谷口茂先生から貴重な逸話を教えていただくことができた。長い手紙の一部を引用することによって全体の主張にズレが起きる危険を覚悟しつつ，ここに引用したいと思う。「当時の研究室の雰囲気の一要素として，外国語習得の熱気が高かったということです。・・・岸本ゼミで使っていた英文のテキスト—確か比較宗教学に関するものだったように思います—を，先生はよく元持嬢（恭子先生の旧姓）に読ませました。・・・元持嬢は英語の発音と抑揚が見事で，そのことを褒めたら，《学問には読解力の方が大事ですよ》と軽くイナされました。・・・この出来事が印象に残っているのは，《まず外国語だ，それから宗教学だ》とでも言えるような当時の学生たちの傾向を，これが象徴しているからかもしれません。学会全体も，まだまだ舶来の理論を学習するのに懸命だった時期ですから，この光景は，その反映とも言えましょうね。それから四十数年ですから，研究室の空気も随分変わっているでしょうし，それが自然の成り行きです。しかし，外国語に限らず言語

一般の諸相に対する真剣な取り組みという精神態度は，今でも，いわば学統として維持されているのではないかと思います。・・・」当時，岸本ゼミでは増谷先生の東京外国語大学での愛弟子たちが一つの勢力を作っていたことも手紙で知った。谷口茂先生から英語の発音と抑揚の見事さを褒められて，《学問には読解力の方が大事ですよ》と切り返した恭子先生。本当は《アラ，私，読解力だってあるのよ》と言いたかったのだと思う。そう言えば，日光にある別荘にご一緒した時に聞いた話。恭子先生は津田塾大学にも合格されたが東京外国語大学を選ばれた。津田塾の学長から「ぜひ，本学にきて欲しい」という手紙がきたそうだ。恭子先生の英語力のすごさがうかがえるというものだ。とにかく，恭子先生が宗教学研究室に「風」を吹かせたことは確かだ。それを嗣ぐ者は誰だろう。まず，同窓の女性たち。国際宗教研究所主催のシンポジウム〈女性と教団〉を機会に組織された「宗教と女性」研究会（東大の枠を越える組織）のメンバー。恭子先生が情熱を込めて青写真を作成された川村学園女子大学人間文化学部の学生たち。恭子先生の下で宗教学を勉強したいと希望して日本文化学科に入学したＦ子さんは先生の急逝に衝撃を受けている。恭子先生が学校案内を持って高校回りをされた成果だったのに。川村では現在も恭子先生の研究室は保存され，ジェンダーなどの研究会で使用されることになっている。恭子先生の意志を嗣ぐ者は多い。女性だけに限られることはないだろう。長男の渉（わたる）氏は〈言語学〉の道を選び，長女の美由紀さんは〈食育〉の道を選んだ。母の力は強い。母の誇り高く毅然とした姿勢を２人は見事に引き嗣いでいるのだから。

最後に，恭子先生！ 私を甘えさせてくださって，本当にありがとうございました。いずれ，私もそちらへまいります。その時は，また，おしゃべりの続きをやりましょうね。